

鎌倉時代中後期の尾張と天皇家

松 島 周 一

はじめに

平成十三年（二〇〇一）に刊行された『愛知県史 資料編八 中世一』の巻末には、尾張・三河の「国守・知行国主一覽」（以下「一覽」と略記する）が掲載されている。筆者もその作成に関わった一人であったが、当時の力不足から現在では修正が必要な点も出て来ている。そのため、既に寛元四年（一二四六）の尾張の一事例に関する若干の報告を行なう機会を与えていただいた⁴¹（以下、これを前稿とする）。今回はその結果を出発点として、さらに考察を進めた点をまとめ、現時点で筆者が必要であると考えている「一覽」の尾張部分への修正意見を提示してみたい。その上で小稿では、それらの検証からみえてくる尾張の知行と国務に関する流れの大筋を、特に鎌倉中後期の段階で辿ってみようと思う。この時期を対象とするのは、天皇家と

の関係に注目したいからである。前稿でもみたように、尾張の歴史に院分国化という形で天皇家が深く関わってくるようになるのが、ちょうどこの段階からであった。さらにそうした関わりが、以後も長くつづくことになったと、随処にあらわれる事例から筆者は想定している。鎌倉時代の中央政治と地域の関わりを考える時に、分国や知行国の問題は重要な検討の材料になるであろうし、その際に天皇家の存在が意味を持つ場合も多いことは、前稿での事例検討からも、ある程度認めることができるのではないか。「一覽」の検証を切り口として、天皇家との関わりという側面からみた鎌倉時代の尾張の歴史について、その特色の一端を探ってみることが、小稿の目的である。

一 寛元四年の「院分国」尾張

鎌倉時代、尾張と天皇家との関わりが明確に捉えられるのは、現在の史料状況から辿る限り、寛元四年（一二四六）からであったと思われる。この年の二月一日、前月に譲位したばかりの後嵯峨院と前関白近衛兼経との間で次のような遣り取りがあった。

【史料一】

（寛元四年二月一日）越前事、自（後嵯峨）院内々以二品（源親子）文有仰、存知旨密々申了、二品状如此、

ゑちせんハ、うちくも申され候しやうに、御分のくに（国）、なり候へしとて候、いよ（伊予・はりま（播磨）もそのうちにて候也、いよはかハ（替）りにをよ（及）ハす候、これハいかて（争）かかハリな（無）くて候へきなれハ、いつく（何処）にても給ハらせ給へと、おほかた（大方）さも候ぬへきくに（国）の候はねハ、わろ（悪）く候とも、まつ給ハらせ給て、ひんき（便宜）に申かへられ候へかしと、申せと候、

御返事、

くにのことうけ給はり候ぬ、かはりのさた（沙汰）にをよハす候、たゝめ（召）され候へかし、もし又さも候ぬ

へくハ、このくに（越前）を右府（鷹司兼平）にた（給）ひ候て、をはり（尾張）をめされ候へかしと、申させ給へく候、このやうもこちな（骨無）く候ハ、申さるゝにをよハす候、⁽²⁾

【引用史料中の（ ）部分は筆者の注記。以下同じ】

後嵯峨院にとつては院分国の確保が急務であり、それを自分の乳母である源親子を窓口として、兼経と交渉したものである。「越前・伊予・播磨を分国として希望しており、越前の現在の国主である兼経には代替の国を与える。ただ、今のところ適当な国が無いので、取り敢えずはどこでもいいから代替の知行国として、あとからゆつくりと、兼経が希望する国と交換してもらいたい」。これが後嵯峨院側の言い分であつた。それに対して兼経は仲介の源親子に、「代替の国は要りませんから、どうか越前を分国にして下さい」と応じた上で、「もしあなた（親子）が失敬な話であると思ったら後嵯峨院には奏上せず無視してもらつて構わないのですが」と留保を付けながらも、「（院が）代替の国も渡さずに越前を召し上げることではできないとお考えでしたら、越前を兼平に給わり、その代わりに尾張を院の分国になさるよう奏上していただませんか」と求めている。兼平は兼経の弟であり、五摂家の一である鷹司家の祖となる人物である。この年十九歳、寛元二年から右大臣の地位に就いていた。この遣り取りだけを見すると、兼経は「院が求めている越前

を兼平に与える代わりに、尾張を召し上げてほしい」と述べているのであるから、あたかも現在の尾張の国主は兼平であるかのようにも思える。筆者もかつてはそのように速断し、それを「一覽」にも反映させたのであるが、これは誤りであった。この史料と、それに関わる政治的な背景については前稿で詳述したので、そちらを参照していただければと思うが、そこで述べたことにも最低限で触れておく。尾張はもともと兼経の知行国であったと考えられるものの、当時は貴族社会の実力者である九条道家とその子の鎌倉殿頼経によって、頼経の近臣である北条時章が国守に補任されていた。兼経の知行国主としての権利が、実質的に奪い取られていたのである。兼経はその尾張を（近衛家側から差し出す）院分国の候補としてほしいと言うことで、道家たちへの異議申し立てを行なったといえよう。そして、兼経自身さえ成算のなかったこの申し立てを、後嵯峨院は受け入れることになる。

まず当時の越前については、近衛家の知行国であったこと、その知行は国主がこの時期に兼経から兼平に交替しつつ継続していたことの二点を確認できる⁹⁾。一方の尾張については、同年十一月、知行国主として久我通光の名を確認することができる¹⁰⁾。彼の同母妹は土御門天皇の生母となった承明門院在子であり、兄通宗の女通子がその土御門との間に後嵯峨院を儲けている。さらにその後嵯峨院の乳母となったのは通光の異母妹の親子であり、前記のように譲位した後嵯峨院の側にあつて、兼

経に分国を要求する窓口となっていた人物であった¹¹⁾。通光は後嵯峨院と二重三重に人脈で繋がっていたのであり、院評定衆の一人であつたともされる¹²⁾。後嵯峨院は二月の段階で兼経の意向を受け入れ、尾張を院分国として、自身と関係の深い通光に知行させたのであろう。すなわち当時の尾張では、院分国の下で院近臣が知行国主になるという複合形態が存在していた可能性が高いのである¹³⁾。

以上の経緯からは、史料一の前後の段階で、尾張は近衛家の知行国から後嵯峨院の分国に移動していたこと、鷹司家の始祖となる兼平の知行国ではなかったことを確認することができよう。まずそれらの点で、「一覽」の内容を一部修正することが必要になる¹⁴⁾。

二 後嵯峨院政と尾張

おそらく後嵯峨院政下では、尾張が院分国となる状態がしばらくの間つづいていたと推測される。その根拠となる史料は、まず正元元年（一二五九）四月のものが挙げられる。そこで重要なのは、中院雅忠が尾張の知行国主であつたと確認できる点である。

【史料二】

（四月）廿七日庚子、天晴、……申剋（後嵯峨）院宣到来、

任王経法供米事、如此催定候也、早遣請使可有御問答候、

……恐々謹言、

四月廿七日

左少弁（平）高輔

……

被相副注文折紙也、

御修法供米

右大臣（山階実雄）

三十石 讃岐国

春宮大夫（中院通成）

三十石 播磨国

新大納言（二条資季）

十石 薩摩国

中宮権大夫（中院雅忠）

十石 尾張国

平宰相（平時継）

十石 出雲国

行登

三石 丹波国

雑掌追可申、

十七石 内々御沙汰

一位殿御局

六石

……

(9)

(10)

これは醍醐寺文書の中に入っているから、後嵯峨院から醍醐

寺に対して、院宣で仁王経修法供米の調達と、その対象となる国々が指示されたものである。国ごとに「催定」める担当者が知行国主と考えてよいであろう。讃岐国の担当となっている山階実雄が、建長七年十月二十七日、後嵯峨院の亀山殿移徙について「大炊御門大納言〔実雄〕賜院分讃岐国雖相営、卿〔郷カ〕保多有別給、猶可謂大功歟」⁹⁰と記され、院分国讃岐の知行国主であったと確認できることから、この想定が裏付けられる。これを踏まえてまず尾張からみていくと、中院雅忠が知行国主にあたる。彼は前章で登場した久我通光の息子である。前章での経緯を踏まえてこの現象をみると、尾張では分国主である院の下で、近臣による知行国の相伝がなされていたと推測できるであろう。

この推測を補強するためにも、少し話がわき道にそれるが、この史料に挙げられている他の国々についても、後嵯峨院との関係がどのようなものであったのか、簡単に触れておきたい。後嵯峨院はなぜ、これらの国々を供米調達の対象としたのか。それを考えることで、尾張の位置づけもより明確になると思う。結論からいうと、筆者はこれらの国々が当時は院分国となっていた可能性が高いと推測している。少なくとも、院近臣が知行する国々であったことは確かである。それゆえに後嵯峨院はこの国々からの供米調達を指示し、醍醐寺に調達したものである。とりわけ尾張以外の五国のうち讃岐・播磨・丹波の三国は、ほぼ確実に後嵯峨院分国であった。

播磨は史料一のように後嵯峨院がまず分国化を求めた国であった。建長七年（一二五五）十二月の中院具氏、康元元年（一二五六）十二月の高階邦経、正元元年正月の園基顯らの播磨守補任は、いずれも「院分」としてのものであり⁹⁰、のち文永九年（一二七二）に後嵯峨院から後深草院に譲られる⁹¹。さらに嘉元二年（一二三四）には伏見院に譲られているが、その際に後深草院は「播磨国御管領勿論候、分国譲付太不可然事也、然而文永別譲賜、已可謂相統也、但一廻之間不可被改吏務」と述べている⁹²。本来なら院分国を相伝することは望ましくないが、播磨は後嵯峨から与えられた特別な分国であり、もうわれわれ持明院統で継承すべきものとなっているのではないか、というのである。当時の播磨の知行が、天皇家とりわけ持明院統の家領化していた様相が窺える。

讃岐もやはり建長五年正月の源雅言、建長六年正月の藤原経業が「院分」として国守に補任されている⁹³。文永七年にも「御分国」と明記されており⁹⁴、文永九年には後嵯峨院が亀山院に譲ることになる一国である⁹⁵。嘉元三年には亀山院から後宇多院に⁹⁶、徳治三年（一二三〇）には後宇多院から後醍醐天皇に譲られている⁹⁷。こちらでもやはり後宇多院が「凡諸国相伝之法、雖乖正理、人臣猶称之、況哉代々由緒容易難改、仍任先皇代々例、所載譲状也」と述べており⁹⁸、実態として讃岐が大覚寺統の家領となっていたことを見てとれる。

さらに丹波は宝治二年（一二四八）に「丹波守藤頼親」につ

いて「日來（堀川）高雅兼帯也、前黄門（葉室資頼）頗有所望之氣、仍予（葉室定嗣）申任了、御分国司也、予知行過八省輔之由、納言存知之」⁹⁹と記されており、史料一のとどの段階で、院分国とされていたことが確認できる。この一文からは、葉室一門の中でも又従兄弟同士の定嗣と資頼の間で丹波国守をめぐる駆け引きがあったらしいことが窺える。院分国である丹波の知行国主をつとめていた定嗣は、それまで養子の高雅を国守としていたのであるが、資頼からの要求によって、そちらの孫であり養子でもある頼親を新国守に任じたのである。のち康元元年（一二五六）には定嗣の実子定藤が丹波守に補任される¹⁰⁰。さらに正元元年には「丹波守高朝」の名がみえる¹⁰¹が、これは藤原忠高と資頼の娘との間に生まれた藤原高朝に比定できよう¹⁰²。後嵯峨院の下で葉室一門の定嗣系と資頼系が国務を担う丹波の体制は、正元元年まで継続していたものであろう。実際、「丹波守高朝」は、後嵯峨院の大宮御所移徙に付き従う「先殿上人」の一人として記録に残る人物であった¹⁰³。ただ、史料二のように、この直前の正元元年四月に、後嵯峨院の指示の下で丹波の国務を握っていたと思われるのは「行澄」という人物なのである。これは史料に書かれたままの表記であるが、おそらく八月の後嵯峨院の大宮院移徙に際して「御後官人」をつとめた「行澄」のことではなからうか¹⁰⁴。この推測が成り立つのであれば、この時の丹波の国務のあり方は相当に異常な状態である。あるいは四月は高朝が補任される前の空白期間であったの

かもしれないが、ともかく一個の「官人」に過ぎない人物⁶⁷⁾が国務に携わる事態がなぜ生じ得たのか。彼が大きな權威や權力を持つ国主の指揮をうけて、一時的に供米の徴収にあたつたためと考えなければ説明がつかないのではないか。そうした国主として後嵯峨院が相応しいことは、贅言するまでもないであろう。以上のいくつかの徴証からは、正元元年当時の丹波が後嵯峨院分国であつたと考えることが最も整合的な想定になる。

薩摩と出雲については、こうした証拠を集めることがむずかしいが、二条資季は当時の記録に「院司二条新大納言資季」と記される⁶⁸⁾ように後嵯峨院庁の別当をつとめていたと思われる。平時継は後嵯峨院の下で目立った活動を見せた訳ではないが、院が御所の移徙や御幸を行なう際には供奉の公卿として名前を見せることも多い⁶⁹⁾。また文永三年（一二六六）には正二位に叙せられているが、それは「蓮華王院供養、大宮院御給」によるものであつた⁷⁰⁾。蓮華王院は後白河院によつて創建され、院領は天皇家領庄園の一部である。大宮院（藤原妹子）は後嵯峨院の中宮であり、後深草・龜山両天皇の生母であつた。こうした事実から、時継も後嵯峨院の近臣の一人であつたと推測することも、強ち不自然ではないであらう。少しのちのことになるが、弘安十一年（一二八八）になると、正月の叙位に関わつて「従四位下平経親左衛門権佐如旧、左衛門権佐平経親檢非違使如元（此事珍重也、……夕郎事、依被超越（日野）俊光、含鬱不出仕、仍直可被任弁官之由有勅約、然而猶不出仕、不休鬱之

間、依所望重有此恩、当時執權卿之愛子也、不能左右、……）」との記事がみえる⁷¹⁾。経親は時継の男であるから、この「当時執權」は時継を指す。この時の経親には、従四位下に昇つたあととも左衛門佐にとどめるという異例の措置がとられたが、それは藏人への就任を日野俊光に先行され、すっかり腐つてしまつた経親をなだめるためであり、前年から治天となつた後深草院の院庁執權として權勢を振るう時継の愛子ゆえの特例なのだ、と記主の西園寺公衡が慨嘆しているのである⁷²⁾。時継は後深草院政が発足するとその中枢に位置することにもなつた。このような展開からみても、彼が後嵯峨院政以降、天皇家に近侍した公卿の一人であつたことは疑えない。従つて、薩摩・出雲ともに正元元年当時には後嵯峨院の分国であつたか、少なくとも院近臣の知行する国であり、それゆゑ後嵯峨院の指示の下で仁王経修法供米の調達がなされたことと捉えることができる。

以上のように、史料二は正元元年当時の後嵯峨院政の様相を分国や知行国という側面から考える上で、興味深い材料となるものである。尾張はその中に位置を占めるのであり、後嵯峨院の強い影響下にあつたとの想定はより高い蓋然性を帯びてくるであらう。中院雅忠を知行国主として確認できることとあわせて、当時の尾張が院分国のひとつであつたことにほぼ間違いないと思われる。「一覽」作成の段階では、残念ながら筆者はこうした検討を深めることができていなかったのである。

三 龜山院政と尾張

後嵯峨院は尾張の歴史にとっても関わりの深い人物であったといえようが、文永九年（一二七二）二月に没した。前記のように後嵯峨院は、後深草院と龜山天皇の兄弟に対して、実質的に天皇家領化していた国々、具体的には後深草院への播磨と、龜山天皇への讃岐・美濃を譲り残していた³³⁾。この三国（実際には他にもあったが、それはあとで触れる）は天皇家で確保しつづけたのであるが、反面では、ほかに分国があつたとしても、そちらは永続的な知行の対象ではなく、時期によつて天皇家との関係も変動するということである。尾張もそうした国であつたし、特にこの時期の尾張国守には、「一覽」に示したように、弘長元年（一二六一）に二階堂行有、文永二年（一二六五）に足利（斯波）家氏、文永十一年に名越公時と幕府関係者が補任されることも多く、その様相については朝幕関係などを踏まえつつ検討する必要がある。

後嵯峨院下であらわれてきた天皇家と尾張の関係が、どの段階で途切れたのかは分からない。ただ、この関係はやがて復活したようである。それを探る手がかりとして、次の史料に着目したい。弘安二年（一二七九）十一月の段階で、誰が尾張の国務にあたつていたのかを確認できる史料である。当時は、文永十一年正月にはじまつた龜山院政の時代である。

【史料三】

同（弘安）二年十一月廿七日神興新造奉獻（龜山）上皇御願、序沙汰、

二万七千疋（室町院）・万疋（聖護院宮）・五千疋（堀河大納言（基具））・万七千疋（前藤大納言（為氏）、近江国役敷）・三万二千疋（高倉 永康卿、尾張国役）・廿五万疋（橘 知嗣朝臣、同別納等役）・二万七千疋（因幡国）・五万疋（備前国）・武家用途五万疋・任官功十五万九千八百疋、

猶不足分内々御沙汰、³⁴⁾

【引用史料中の「」部分は割書。以下同じ】

龜山院の下で行なわれた日吉神興新造に関わる費用進納のリストである。院の御願であり、院庁の沙汰として行なわれたというのであるから、その費用を負担したのは院の周辺の者たちであろう。

室町院は後堀河天皇の娘である暉子内親王であり、後嵯峨院とは又従兄弟の関係になる。膨大な庄園群を管領しており、それがのちに室町院領として幕府を巻き込む大覚寺統と持明院統の紛争の種となったことはよく知られている³⁵⁾。室町院は正安二年（一二三〇）に没しているが、生前、弘安年間（一二七八～八八）に龜山院に所領を譲る意思を示し、のち正応六年（一二九三）には伏見院に譲り直したという³⁶⁾。そのあたりの経

緯は不詳であるが、少なくとも弘安二年の頃はまだ、室町院と亀山院の關係は良好であったということになる。聖護院宮は後深草・亀山の弟にあたる覺助法親王が忠助法親王ではなからうか⁽⁸⁰⁾。堀川基具は前出の久我通光の兄である堀川通具の孫であり、史料一の結果、尾張が院分国となったと考えられる寛元四年の段階で尾張介に任ぜられた経歴をもつ⁽⁸¹⁾。後嵯峨院政からひきつづいての院近臣とみてよいであろう。前藤大納言に御子左(藤原)為氏を比定したのは、五年前の文永十一年(一二七四)に四男の五条為実が近江守に補任されており⁽⁸²⁾、「近江国役」を院のために調達する知行国主として相應しいと思われるからである。為氏は藤原定家の孫であり、建治二年(一二七六)に亀山院の院宣によって統拾遺集の撰集をはじめ、弘安元年に奏覧した人物である⁽⁸³⁾。

次に因幡国であるが、実はここは徳治三年(一二三〇八)の段階で「後嵯峨院御代、予(後宇多院)在坊之昔、為先皇(亀山院)勅命被定分国、于今無相違」⁽⁸⁴⁾といわれており、後嵯峨院の在世中から既に、亀山天皇の皇太子である世仁親王すなわち後宇多天皇の分国となつて、何十年も維持されつづけたのである。弘安二年はその途中であるから、亀山院にとっては実質的に自らの分国といつてよいものであつたらう。一方、備前国は後深草・亀山の生母である大宮院の分国である。正嘉二年(一二五八)には藤原基顕が「大宮院御分」として備前守に補任され⁽⁸⁵⁾、弘安八年(一二八五)には東大寺の注進状に備前国

が「当時則大宮女院御分国歟」と記されている⁽⁸⁶⁾から、その間一貫して女院分国であつたと推測できる。亀山院の御願に協力して分国から費用の調達を行なつたのも自然な話であらう。

このように確認できると、以上の国々や人物に較べても最も多額の費用が調達されている尾張の場合、亀山院との間に相当密接な繋がりを帯びていたことは想像するに難くない。その繋がりを具体的に担つていたのが、高倉永康と橘知嗣であつた。その場合の両者の關係は、近江の知行国主である御子左為氏と同じく国役分を担う永康が知行国主であり、別納という形で国内への賦課を行なう知嗣が国守であつたと判断するしかないであらう。

ただ、永康は従三位に昇るのがやつと弘安六年になつてからのことであり、さほどの官歴もない⁽⁸⁷⁾。そうした人物が、個人の地位や実力によつて尾張の知行国主になつていたと考えるのは難しいのではないか。ところが永康には、そうした公的な地位とは別の立場を見出すこともできる。まず、彼は後嵯峨院以来の院近臣として、その立場を築いてきた人物であつた。弘安六年四月、従三位に登つた彼について、ある貴族は次のように評している。「非重代諸大夫也、自故院(後嵯峨)御時依被召仕、被聽二代之仙籍、昇三品之卿位、凡匪直也事也」⁽⁸⁸⁾。後嵯峨、亀山二代の院政下に登用され、異例の昇進を遂げた人物として、永康は周囲に認識されていたのである⁽⁸⁹⁾。それだけに、彼は院のためにさまざまな活動に従事することになる。一例をあげる

と弘安六年九月、安嘉門院（邦子内親王）が亡くなったあとの展開について、「新三位永康卿自関東上洛、安嘉門院御遺跡、（龜山）上皇可有御管領之由計申云々」⁽⁴⁰⁾と伝えられる。永康が幕府との折衝により、龜山院による門院領の継承を実現させたというのである。以上から推して、弘安二年当時の永康については、治天である龜山院の近臣として尾張の知行国主に任ぜられたのであり、それゆえ院の意向に沿って国内への賦課を行なったと考えるのが自然であろう。

一方の知嗣は、正応五年（一二九二）に没するまでの極官が正四位下左京大夫であった⁽⁴¹⁾。当然ながら永康よりも下位の貴族であるが、では彼は知行国主永康によって補された国守であったのか。その点については、文永六年（一二六九）に後嵯峨院の御願により日吉七社の神輿が新造された時、三社分について「已上知嗣給加賀国進十五万疋」とされることが参考になる⁽⁴²⁾。他の四社については関白鷹司基忠、権中納言西園寺実兼と元摂政の一条実経、元右大臣の花山院定雅という錚々たる面々がそれぞれ一社ずつ、自らの知行国の国役で負担していた⁽⁴³⁾のに較べると、知嗣の存在は明らかに異質である。彼が撰関と並ぶ、あるいはそれ以上に富裕な知行国主であったとはとても考えられない。「給加賀国進十五万疋」との書き方から推しても、おそらく後嵯峨院の下、臨時の費用調達を進める財務担当の知行国主として加賀に送り込まれたのである⁽⁴⁴⁾。ちなみに知嗣は翌文永七年八月、後嵯峨院の押小路殿（三条坊門殿）への移徙

にからんで「讃岐守知嗣造進之、勸賞任大膳大夫（元五辻宰相入道（忠継）子息忠藤也）」、後聞、知嗣知行五ヶ国内加州辞之、宰相入道拝領云々」⁽⁴⁵⁾といわれている。造作への勸賞として大膳大夫に任じられた知嗣から、その職を失った五辻家（諸系図では忠継の男の中に忠藤は記載されていないが）へ知行国のうち加賀が譲られたという。知嗣の地位で五ヶ国を知行するとは想像の外であるが、前記のように院の下で分国などの財務担当をつとめていたという意味であれば理解可能である。それゆえ、加賀について知嗣が「辞之」して五辻家が「拝領」するという、後嵯峨院による職の調整がなされたのであろう。なお、史料にみえる通り、この時の知嗣は院分国讃岐の国守も兼ねていたから、計六ヶ国を担当していたことになる。院が近臣に国を管領させる形は、国守でも知行国主でも有り得たということである。さらに彼は文永十一年七月にも、「大膳大夫知嗣知行摂州、可造営之由領状云々」と、住吉社造営のために摂津の知行国主とされている⁽⁴⁶⁾。以上をまとめれば、橘知嗣を、財務的な手腕によって院の信任を得ていた近臣の一人と位置づけることが妥当であると思う⁽⁴⁷⁾。その人物が、ここでは尾張の国守として、今度は龜山院のためのより莫大な費用調達に才腕を振るったことになる。このように見てくると、この時の尾張では、知行国主ばかりでなく、国守もまた、龜山院によって送り込まれていたと考えることができよう。このことは、当時の尾張が院分国であった可能性を強く示唆する。

史料三で注意したいのは、尾張だけが知行国主と国守の担当分を併記していることである。普通ならば、近江の為氏のように知行国主がその国の負担分をすべて担当する形の記載になるのではないか。これは永康・知嗣の両者ともに院の指示の下にあったためと考えることができよう。すなわち亀山院が尾張の分国主として、近臣の永康と知嗣をそれぞれ知行国主と国守に補し、費用の調達に当たらせたことが、こうした記載に反映されているのである。知嗣が尾張国守として廿五万疋という飛び抜けた負担額を国内に賦課できたのも、国主である亀山院の意向に従ったからこそ可能であったのではないか。以上の検討から、この時の尾張が亀山院の分国であったことは、ほぼ確認できると思う（この点でも「一覽」は修正が必要になる）。亀山院政の発足は文永十一年正月のことであった。そのあと弘安二年までの間に、尾張は再び院分国となっていたのである。

おそらくこうした流れの中に置くことで、意義がより明らかになるであろう現象を、弘安六年にも見出すことができる。「一覽」にも示したように、弘安六年九月、尾張国守として藤原景房の名が史料上にあらわれる⁵⁵⁾。この景房は同年二月には正五位下に叙せられ、「御寵人京極局父、元下北面、当時被召加上北面⁵⁶⁾といわれた人物である。「京極局」については他の史料に「宮御方（新院（亀山院）若宮、京極局腹）」⁵⁷⁾との記述があるから、亀山院の「御寵人」であることが確認できる。亀山院の寵姫の父で下北面から上北面へと登用された人物が、尾張国

守としても用いられていたことになる。この点からも、当時の尾張が、亀山院によるかなり恣意的な支配の枠組の中に置かれていたことが推測できるのではないか。正しく亀山院は、分国主として尾張に君臨していたのである。

四 『兼仲卿記』弘安十一年四月七日の除目記事から

次に取りあげるのは、弘安十一年（一二八八）四月七日に行なわれた除目である。正応元年と改元される直前のことであった。その際、愛知県域に関わる現象としては、尾張守には平仲定が、三河守には橘邦良がそれぞれ補任されたことを挙げられる。典拠は『勘仲記』すなわち『兼仲卿記』の同日条である。事実の確認としてここまでは問題は無く、既に「一覽」にもこの両名が記載されている。ただ、問題が残るのは、これらの典拠が増補史料大成本『勘仲記』（以下、大成本『勘仲記』とする）にとどまっていたことであろう。史料本文を引用する本編の場合と異なり、「一覽」では自筆本『兼仲卿記』（以下『兼仲卿記』とする）での校合作業までを行っていない⁵⁸⁾。

『兼仲卿記』弘安十一年四月七日の除目記事を確認すると、大成本『勘仲記』と異なり、尾張守平仲定と参川守橘邦良のそれぞれの右側に細字で傍注が付されていることが分かる。本文と同筆と見てよいと思われる。おそらく写本では、のちに筆写

される過程でその部分が欠落してしまったのであろう。「尾張守平仲定」への傍注は

【史料四】

左大将殿御分国、被申任国司、

である。ちなみに「参川守橘邦良」への傍注は「花山院中納言分国」であった。いずれも国務知行に関する重要な情報であるが、「一覽」ではこれらを活用することが出来なかった。筆者はその責任を痛感せざるを得ない。三河守への傍注もかなり興味深い問題につながると思うが、小稿ではそちらには踏み込まず、別の機会に譲りたい⁹⁰⁾。以下では尾張にしばって、この傍注からどのような展望が開けてくるのかを、改めて考えてみる。なお、この問題に関わると思われる政治的背景として、前年の弘安十年十月、幕府からの要求をうけて後宇多天皇から伏見天皇への譲位が行なわれたことを確認しておきたい。すなわち大覚寺統から持明院統への政権交代であり、いわゆる両統迭立という現象が史上にあらわれてくる一過程である。

「尾張守平仲定」への傍注からは、この弘安十一年（正応元年）当時の尾張が「左大将」の知行国であったことが分かる。新国守平仲定は、その下で補任されたのである。当時「左大将」の官は、正二位権大納言であった鷹司兼忠が兼任していた。彼は弘安二年（一二七九）正月十日、十八歳の時に左大将となって

おり、ちょうどこの正応元年十一月八日にその職を辞すことになる⁹¹⁾。いうまでもなく鷹司家は五摂家の一である。兼忠は前関白兼平の男であり、やはり関白をつとめた兄基忠の養子という形になっていた⁹²⁾。その官歴も、こうした家柄に相応しいものということはできよう。この正応元年に二十七歳で権大納言から内大臣、翌二年には右大臣に昇進、四年には一上となり左大臣に転じている。関白氏長者となったのは、永仁四年（一二九六）、三十五歳の時であった。永仁六年には後伏見天皇の踐祚に伴って摂政となるが、年末には上表し、前摂政となった。正安三年（一三〇一）に四十歳で没している。しかし、こうした官歴は持っているものの、兼忠は必ずしも鷹司家の嫡流ではなく、いわば中継ぎ的な役割を果たしていたようにも見える。鷹司家は兼平から基忠、その子冬平という流れで継承された。兼忠自身は関白氏長者となっているものの、家の継承については、自身が兄基忠の子となり、また甥の冬平を子にするという形で、嫡流の穴埋め役と見るのが妥当な立場に身を置いている。その子孫も摂関となることはなく、歴史の表舞台から姿を消していった。

そうした兼忠が、弘安十一年四月当時の尾張の知行国主であった。これは紛れもない事実として確定できる。この、新たに確認できた事実から、尾張の歴史に関わるどのような論点が浮上してくるのであろうか。その検討のためにも、兼忠を取り巻く状況をもう少し洗い出してみたい。まず、彼はどのような

経緯によって尾張の知行国主となったのであろう。弘安十一年当時の彼が、鷹司家の摂関候補者となっていたためなのであろうか。換言すれば、当時の尾張は鷹司家の知行国であったから、次代の摂関を狙う兼忠が、家の代表者としてそれを継承したということなのか否か。しかし、この設問に対してはおそらく否定的な答えが導かれる。確かにこの時の鷹司家で現任の官職を見れば、兼忠が最も上位にいる。のちに鷹司家を継承する甥の冬平はまだ十四歳で、正三位権中納言であった。しかし、散位ではあるものの、いずれも前関白である父兼平・兄基忠は健在である。家として継承する知行国であれば、むしろ彼らが国主とされていたのではなかろうか。また「一覽」では、鷹司兼平が寛元四年（一二四六）に尾張の知行国主であった可能性があるかのように記しているが、筆者がそのように考えたのは、史料一の浅薄な読みによって、後嵯峨院との間で兼平が、自らの知行国であった尾張を越前と交換したと誤解してしまったためであり、既に述べたように、これは誤りであった。尾張は兼平の兄である近衛兼経の知行国（当時は実質的に九条道家と鎌倉殿頼経が支配下に置いていたが）から後嵯峨院の分国へと移ったのである。それ以降の尾張の国務支配に関わるであろう流れは前章までにみてきた通りであり、それらの中では、弘安十一年より以前に兼平や鷹司家と尾張の国務とが関係したという徴証を見出すことはできないと思われる。

一方、小稿で確認できたのは、寛元四年に後嵯峨院の分国に

組み込まれた尾張では、その状態がしばらく継続していたらしいことである。さらに龜山院政期にも、弘安二年までには再び尾張が院分国とされていた。鎌倉中後期において天皇家が尾張を支配する枠組は、かなり強固なものであったと思われる。このように前章までの結果を踏まえて考えると、弘安十一年当時、兼忠は家領の継承としてではなく、個人として新たに尾張の知行国主となっていたのであり、それは天皇家との関わりによってもたらされていた現象である可能性が高いといえるであろう。

以上から、弘安十一年当時の尾張の国務支配の枠組を探ろうとする場合の次の課題として、兼忠と天皇家との関係がどのようなものであったのかに触れる必要が浮かび上がってくる。ただ、前章までは分国主としての後嵯峨院、龜山院に目を向けていたのであるが、この時期には天皇家のあり方自体がより複雑な色合いを帯びてくる。前年十月に踐祚した伏見天皇の即位はこの年三月である。四月に代始めの改元が行なわれて正応元年となった。天皇と治天の座が、久々に龜山系統から後深草系統に移動したのであり、大覚寺統と持明院統のいわゆる両統迭立につながる展開である。こうした権力の移動が起こる（あるいは起こる可能性が生じる）と、兼忠をはじめとする廷臣たちにとっても、両統と自らの立ち位置の関係を考える必要が生じてくるであろう。兼忠はどのように身を処していたのか。院分国である尾張で、知行国主としての地位を個人的に得ることが出

来たこと自体、彼が天皇家との関係を密接に保っていたことを窺わせるのであるが、この時期にはその中でもどちらの系統との関係に傾斜していたのかに注意しなければならないと思われる。そのため本章では一旦尾張から離れ、当時の天皇家と兼忠・鷹司家の関係に言及していくこととするが、これはあくまで尾張の国務支配の枠組を理解していく階梯としての作業である。

五 鷹司兼忠と天皇家

少し遡るが、後深草院の皇子である熙仁親王（のちの伏見天皇）が後宇多天皇の東宮となつたのは、建治元年（一二七五）のことであつた。『増鏡』では亀山・後宇多の系統で天皇位（と治天の座）が継承されていることに失望した後深草院が出家の意思を固めたと聞き、幕府の執権北条時宗が諸方に根回しをして熙仁親王（のちの伏見天皇）を東宮に立てたとされる⁶⁰。持明院統と大覚寺統の分立という流れは、この頃から見え始めたと思われるが、その中で兼忠の立ち位置を検証しようとする、断片的な事例であるが、以下のようなものが見出せる。

まず建治二年六月二十五日は「今日皇太子可有読書始儀」という日であつた。「晩頭」になつて東宮大進である坊城俊定から「公卿等漸参集之由」を伝えられた後深草院が熙仁親王の在所に移動し、儀式が始められる。列席の公卿は摂政鷹司兼平・東宮傅左大臣二条師忠・大納言土御門定実・権大納言四条隆顕・

権大納言鷹司兼忠・中納言治部卿吉田経俊・権中納言徳大寺公孝・権中納言日野資宣・参議左兵衛督滋野井実冬たちである⁶¹。当時十五歳の兼忠が、父の兼平とともに東宮熙仁親王の在所に向向していたことが確認できる。

この時期の摂関家の動きをみると⁶²、かつて後深草天皇の治世から足かけ十年にわたつて摂政・関白をつとめた兼平は、龜山天皇の治世に入ると弘長元年（一二六一）にその座を退き、二条良実、一条実経の兄弟が摂関となる時期がつづいた。文永四年（一二六七）に近衛基平が関白となるが翌年急逝、兼平の長子で東宮（世仁親王、のちの後宇多天皇）傅となつたばかりの鷹司基忠がそのまま関白の座を引き継いだ。しかし文永十年五月になると、翌年の後宇多踐祚を目前にして、基忠は関白と東宮傅の地位をともに失い、九条忠家が関白に、一条実経が東宮傅に、それぞれ就任している。この時には「大麓事有沙汰之由風聞、九条前右大臣（忠家）殿令達多年宿望給云々、驚耳、関東之所為云々」⁶³といわれている。「大麓」は執柄のことであるから、幕府の介入によつて基忠から忠家への交替が進められたというのである。文永十一年正月に後宇多が踐祚したあとは、僅か半年で忠家にかわつて家経が摂政となつた。しかし、その翌年の建治元年になると、家経から再任の兼平へと、再び関白が交替している。この建治元年の関白交替についても「今度事、一向東風吹来之故云々」⁶⁴と、幕府の介入によることは当時から認識されていた。より具体的には、十月十八日に幕府の使者

が入洛して「立太子事、執柄事、所任莊押領事」を朝廷側に伝えた⁽⁸⁸⁾直後の十月二十一日に家経が「無上表儀、三讓表第二度許之」⁽⁸⁹⁾とやや異例の形で急に「辞任」し兼平が再任されていること、当時既に十一歳になっていた熙仁の処遇が、十月

二十七日に親王、十一月五日に立太子⁽⁹⁰⁾と急速に変化していたことを、前記の『増鏡』の伝えるところとあわせ考えると、幕府による熙仁立太子の要求に抵抗した家経が、東使の圧力によってこの段階で罷免されたという構図を想定できるのではない。僅か二年前には基忠を更迭して忠家を閔白に押し込んだ幕府が、今度はそれを自ら否定するような正反対の人事を求めたのであるから、その理由としてはこの段階になって浮上してきた後深草系統からの立太子という問題に着目することが整合的であろう。その場合、兼平ひいては鷹司家の立ち位置は、幕府から熙仁の輔佐を託された親持明院統の側にあったといえようか⁽⁹¹⁾。兼忠はそうした父のもとで、早い段階から東宮熙仁親王に近づいていたのである。

また弘安十一年二月二十七日、前年に踐祚したばかりの伏見天皇が「即位由奉幣」のために「行幸神祇官」する。幣料の調達が遅れたためか、行幸は翌日の午前一時頃にずれこむが、「行幸已成之由」を聞いた後深草院は、その様子を途中で見物する。真夜中、天皇の車に付き従った公卿は権大納言左大將鷹司兼忠・権大納言西園寺実兼・権大納言源具守・権中納言大炊御門良宗・右衛門督園基顯・参議左中将洞院実泰・参議左衛門督中院通重・

参議坊門忠世・参議冷泉経頼たちであった⁽⁹²⁾。兼忠は、このとき行幸を「奉行」した西園寺実兼と並び、最上位の公卿として天皇に近侍していたのである。

さらにこの年十月になると兼忠は内大臣に昇る。その際、前任の久我通基は七月に昇任したばかりで、右大將を兼任していた。ところが「十月廿二日遣勅使藏人佐（日野）俊光、丞相幕下両職一同可辞申之由被仰之、同月廿七日止両職」⁽⁹³⁾と突然その地位を奪われる。伏見天皇はまだ十二歳であるから、実際に「勅使」を送ったのは後深草院であろう。そして同じ二十七日、兼忠が内大臣に任じられたのである⁽⁹⁴⁾。持明院統主導による強引なまでの鷹司家への優遇措置といえようか。

その弘安十一年春、伏見天皇に皇子胤仁（のちの後伏見天皇）が誕生していた。八月には早くも親王宣下をうけ⁽⁹⁵⁾、明けて正応二年（一二八九）四月廿五日に二歳で東宮に立てられることになる⁽⁹⁶⁾。持明院統の皇統が次代まで継承されることが明確になったのであるが、その東宮傳には兼忠がつくことになった⁽⁹⁷⁾。ここまでみてきた限りでは、彼は両統のうちでは持明院統に近く、その信頼を受ける立場に身を置いていたと考えられるし、その結果として東宮傳の地位についてと推測しても大過ないであろう。

以上のような兼忠と持明院統の関係についての見通しを、さらに補強するために、今度は少し先の事例を取りあげたい。正安三年（一二三〇）正月、幕府の要求により、後伏見天皇が讓

位して、大覚寺統の後二条天皇が踐祚する。その直後の二月十六日、「評定」によって「諸国分給人々」することが行なわれた⁽⁹⁰⁾。「当時就朝家要須之仁、伝奏・職事・弁官等浴恩云々」というから、政權交代のあった段階での「当時」すなわち大覚寺統の治世における恩給といった性格の知行国分配であった。「評定」は、新たに治天となった後宇多院の下で行なわれたのであろう。そこでは何ヶ国かの国主が交替しているが、小稿の関心から着目したいのは、兼忠の知行国であった上総が、関白二条兼基のものとなったことである。この出来事にどのような意味を見出すことができるのであろうか。

この時、「元玄輝門院御分国」であった常陸が源定実に与えられていること、「元永福門院御分国」であった備前が「遊義門院（始子内親王）為御分国、滋野井中納言（冬季）拝領」となったことに注意したい。永福門院（藤原鐔子）は西園寺実兼の娘で、伏見天皇の中宮となっていた⁽⁹¹⁾。玄輝門院（藤原愔子）は山階実雄の娘で、後深草天皇の後宮に入り、伏見天皇の生母となる⁽⁹²⁾。いずれも持明院統の關係者であったが、その分国がいずれも他者に与えられたのである。源定実は「当世執權、世事任雅意」と評されており⁽⁹³⁾、後宇多院政下で權勢を振るうことになる人物であった。遊義門院は後深草院の皇女であるが、後宇多天皇の皇后となっていた。そして備前の事実上の国主となった滋野井冬季は、このあと龜山院の後宮に入った昭訓門院（藤原英子）の院司となっており⁽⁹⁴⁾、龜山院の近臣と見てよいで

あろう。すなわち、いずれも持明院統の分国が、大覚寺統側の枢要な人物に与えられたのであり、かなり露骨な差配がなされたといえそうである。もともと、備前の場合には永福門院の父である西園寺実兼への配慮もあったのか、遊義門院への分国主の交替すなわち天皇家内部での遣り取りという形で露骨さを抑えている。また昭訓門院も実兼の女であり、永福門院の妹であったから、その院司である冬季への実兼の反発も抑制されたのではなからうか。勿論、後掲の史料五にも記されるように、これらの女院にはまた別の分国が給されている。しかし、この時期には天皇家關係者の分国であっても、両統間で政權の移動などの要因によって、知行が安泰ではなくなる一面もあったことが、この事例からは窺えるであろう。天皇の交替によって新たな治天が天皇家の頂点に立つと、その下で、天皇家關係者の分国や、近臣たちに与えられた知行国が、前の治天の措置を引継ぎ繰り返す形で恣意的に取り扱われることになったのではなからうか⁽⁹⁵⁾。

以上の検討を踏まえて類推すると、兼忠が失った上総にしても、持明院統の治世に与えられていた知行国を、大覚寺統が没収した可能性が高い。すなわちこの出来事からもまた、兼忠が持明院統に近い立場に身を置いていたことを想定することができるのである。

このように、断片的な事例の積み重ねからではあるが、およそそのころ、兼忠や鷹司家が、両統迭立の流れができてくる

建治から正安の頃にかけて、持明院統に接近する一方で、大覚寺統とは距離を置く立場にあったとまとめることができると思われる。そうであれば、弘安十一年段階でその兼忠が尾張の知行国主であったことに、どのような意味を見出すべきであろうか。ここで話は再び尾張の知行に戻る。

六 両統迭立と尾張

弘安十一年四月に尾張の知行国主であったことが確認できる鷹司兼忠は、おそらくその立場を天皇家から与えられたと思われる。但し、当時の兼忠や鷹司家は、大覚寺統とは疎遠な状態であり、持明院統に接近していたことが想定できる。ここから導かれるのは、この時期に分国主として尾張の知行を差配していた（すなわち兼忠を知行国主とした）のは、龜山院・後宇多院ではなく、後深草院・伏見天皇の側であったという推測である。ところが小稿では史料三などの検討から、龜山院が弘安二年から六年頃に尾張の分国主であったことを読み取ってきた。そうであれば、そのあと弘安十一年の史料四までの間に、持明院統が尾張に関する龜山院すなわち大覚寺統の地位を自らの手に獲得していたと考えざるを得ない。換言すれば、天皇家の中で、尾張の分国主の地位が移動していたのである。

その時期を確定できる史料は見出せないが、敢えてひとつの可能性を求めるとすれば、やはり弘安十年十月の伏見天皇の踐

祚以降であろうか。前章でみたように、大覚寺統と持明院統の間で「政權交代」が起こった場合には、両統との関係の親疎によって分国主や知行国主の異動が生じる現象を想定できる。弘安十年はまだその端緒であるから後年ほど極端な異動はなかったかもしれないが、天皇家内部の主導権の移動に伴って分国（播磨・讃岐・美濃のように後嵯峨院の譲渡によって既に両統の家領化していた国々は別として、それ以外のもの）への指揮監督の権能が譲り渡される、もしくは奪取されることは十分に起こり得たと思われる。こうした推測の是非は措くとしても、改めて確認しておく、弘安六年頃から十一年までの間に尾張の分国主が龜山院から後深草院に代わっていたことは、鷹司兼忠の存在と、縷々述べてきたようなその立ち位置の検討から、ほぼ事実として認定できることなのである。

このように持明院統が尾張の分国主となっていたことは、さらにあとの時期になるとより一層明確になる。次の史料が想起される。

【史料五】

（嘉元二年十月）十日、……参院、終日祇候、持明院殿（伏見院）御管領国々（尾張春宮御分、丹波永福門院御分、備中新院（後伏見院）御分、薩摩玄輝門院御分）等被改吏務、是院（伏見院）御計也、太神宮遷宮神宝用途都無其足之間、為如此事御沙汰云々、……⁽⁸⁴⁾

ここからは、嘉元二年（一三〇四）十月の段階で、尾張が持明院統（後深草院は七月に没しており、伏見院がトップになっている）の分国であったことを確認できる。当時の春宮は宣仁親王であり、四年後の延慶元年（一三〇八）に踐祚して花園天皇となる。前記の正安三年（一三〇二）二月に行なわれた、大覚寺統の政權復帰に伴う分国・知行国の再配分記事においては、尾張についての記述は見えない。後深草院・伏見院もそこでは自らの院分国である播磨のほか、尾張など何ヶ国かの支配を守り抜いて、以後につなげていったものであろう⁽⁸⁶⁾。

ただ、このあとの尾張知行をめぐる天皇家内部の状況は、かなり錯綜したものになっていくのではなからうか。まず、これは以前にも指摘した⁽⁸⁷⁾ことであるが、尾張はやがて持明院統の手から離れていったと思われる。「一覽」に載せたように応長二年（一三一二）正月十三日に尾張守となった葉室光顯は、その経歴から推して、文保二年（一二一八）に踐祚することになる後醍醐天皇の側近であったと想定することができているのではない⁽⁸⁸⁾。それゆえ遅くとも応長二年より以前に、尾張は持明院統の分国から離れ、むしろ大覚寺統の影響下に入った可能性がある。応長二年といえ、花園天皇の在位中であり、伏見院が治天として君臨していた時代であるが、延慶元年（一三〇八）の花園の踐祚によって東宮分国としての役割を終えた尾張を、ひきつづき新東宮尊治の分国とする宥和措置が持明院統によっ

てとられていたのかもしれない。

ところが、やはり「一覽」から窺えることであるが、鎌倉末期になると再び様相が異なってくる。

【史料六】

元徳元年十二月八日庚寅、天晴、午一点參仙洞（後伏見院）、宮司課御調度以下条々、所奏聞也、腋御膳事、為御乳父役之上、就尾州役、今日小供御旁理運也、可沙汰進之由、可仰前右府（今出川兼季）之旨、以女房奉書、今朝被仰下之間、欲向彼第之處、前槐参会之間、即令申其趣之處、申領狀了、小時退出、⁽⁸⁹⁾

元徳元年（一二二九）は後醍醐天皇の治世である。後宇多院は元亨四年（一二二四）に没しており、天皇親政といつてよい時代であろう。その年の末、東宮量仁親王（のちの光厳天皇、後伏見院の皇子）の元服が行なわれた。十二月八日にはその予定が取り決められる（但し一度延期される）。史料六はそのについて記した一節と考えられる。今出川兼季に対し、後伏見院が日野資名を介する形で、「腋御膳の調進は乳父の役目であり、尾張の国役でつとめてもらう。」と命じたところ、兼季もそれを了承したというのである。ここからは、兼季が量仁親王の乳父であり、また尾張の知行国主であったことが窺える。そうであるからこそ、乳父として果たすべき役割が尾張の国役として

課せられるという論理が成り立っているのである。兼季（実は資名も同様なのであるが）が量仁親王の乳父であったことは、別の記録に「前右大臣（兼季）・前藤中納言（資名）（兩人御乳父）」⁹⁰とあることで確認できる。これだけでも兼季が持明院統に近い立場の貴族であったことが十分に見て取れるのであるが、念のためにこの前後の彼の足跡を追ってみると、元亨三年（一二三三）に右大臣を辞したのち長く前右大臣であったものが、後醍醐が挙兵し光厳が踐祚した翌年の正慶元年（元弘二年・一二三二）に太政大臣に任ぜられる⁹¹。ところが後醍醐が復権した元弘三年五月、太政大臣であった事実そのものが否定され、「前右大臣」として処遇されることになった⁹²。この推移をみても、当時の兼季が持明院統に寄り添う立場に身を置いていたことは容易に理解できる。従って、史料六から彼が尾張の知行国主であったと確認した場合、その地位は後伏見院から与えられたものであったと考えて大過ないであろう。伏見院は文保元年（一二二七）に没していたから、既に後伏見院が持明院統のトツプなのである。尾張への支配権は、天皇家内部で再び持明院統へと移動していたのであった。

こうした鎌倉時代末期における展開が、なぜ生じていたのかについては、当該期の政治情勢や朝幕交渉の推移などと照らし合わせて検討を進める必要があるが、現在の筆者にはまだその準備がなく、すべては後考に譲らざるを得ない。ただ、以上みてきたところからでも、鎌倉時代の末に至るまで、尾張の

国務支配に関する最上位の地位が、内部での変動があったとしても、天皇家によって保有されつづけていたという事実については、改めて指摘することができると思う。そうであるからこそ、鎌倉時代末期においては、天皇家の分裂すなわち兩統迭立に揺れる政治過程の影が、尾張の歴史にも色濃く差していたといえるのである。「一覽」においても、本来はこうした視点からの工夫が加えられるべきであったと、その責任を痛感している。

おわりに

小稿で述べてきたことは、寛元四年（一二四六）以降の鎌倉時代中後期において、多少の断絶はあったとしても、天皇家が尾張の分国主としての地位を保有しつづけていたこと、しかし後嵯峨院や亀山院が天皇家の中心として安定していた段階から、大覚寺統と持明院統の兩統迭立の段階へと移ると、尾張への支配権も兩統の間で揺曳していたと考えられること、などの表面的な事実関係の指摘に止まる。その政治史的な背景や、尾張国内への影響などについては触れることができなかった。その意味では小稿が、分国・知行国としての尾張の歴史を検討する上での中間報告にすぎないことは筆者の自覚するところである。ただ、このような一文を草する機会を与えられたことに甘えて、筆者に多くの責任が存し、それゆえどこかで補訂の義務

を負うことになる「一覽」の不備について、取り敢えずいくつ
か修正の見解を提示して、読者諸賢のご高覧に供することを
許しただきたいと思う。その上で、最後に取えて強調してお
くとすれば、鎌倉時代中後期の尾張は、天皇家そして大覚寺統
と持明院統にとつての重要な分国のひとつなのであり、むしろ
尾張という窓口から当時の政治史の一端を垣間見ることもでき
るであろうということである。鎌倉時代の尾張をめぐる政治的
動向は、おそらく従来考えられてきた以上に豊かな内容を持つ
ているのではなからうか。

なお、筆者がこのような検討を行なうことができたのは、現
在もなお愛知県史編纂の末席に列なっているため、さまざま
史料に接する機会に恵まれ、また「一覽」など以前の仕事にも
目配りする必要があるからに他ならない。愛知県史編纂に関わ
る多くの方々に感謝の意を表するとともに、筆者の力不足から
今回このような補訂作業を行なわねばならなかったことも改め
てお詫びしたいと思う。

【注】

- (1) 拙稿「寛元四年の「院分国」尾張をめぐる攻防」(『愛知
県史研究』二〇、二〇一六年)。
- (2) 『岡屋関白記』寛元四年二月一日条。
- (3) 前掲注一拙稿。

(4) 『岡屋関白記』寛元四年三月十日条。

(5) 『葉黄記』寛元四年十一月五日条。『愛知県史 資料編八
中世一』所収第三〇三号史料(以下、愛一・三〇三のよう
に略記する)。

(6) 『尊卑分脈』(新訂増補国史大系本を使用。以下同じ)第
三篇四九七頁以降。

(7) 橋本義彦氏「院評定制について」(『日本歴史』
二六一、一九七〇年。のち同氏『平安貴族社会の研究』
「一九七六年、吉川弘文館」に収載)。

(8) 院宮分国と知行国との関係をどのように捉えるのかにつ
いては、さまざまな研究史がある。その全体像に言及するこ
とは筆者の能力を超える。ただ、筆者はかつて、少なくとも
鎌倉中後期の三河の事例に限定して見た場合には、橋本義彦
氏が「院宮分国と知行国」(『律令国家と貴族社会』「一九六九
年、吉川弘文館」所収。のち同氏『平安貴族社会の研究』
「一九七六年、吉川弘文館」に収載)、「院宮分国と知行国再論」
(『続律令国家と貴族社会』「一九七八年、吉川弘文館」所収。
のち同氏『平安貴族』「一九八六年、平凡社」に収載)にお
いて説かれたように、院宮分国と知行国が構造的に異なるも
のであり、それらが複合的に存在していると捉えた方が、整
合的な理解が可能になるのではないかと述べた(拙稿「鎌倉
時代の三河国」『安城市史研究』三、二〇〇二年)。少なく
とも鎌倉中後期の尾張についても、そうした見方が諸事例を

理解する上で整合的なのではないかと、現在は考えている。これはあくまで筆者が接した僅かな史料からの推論であり、そうした限定の上で以下の論述を進める。

(9) 「仁王経法記」愛一―三七一。

(10) 春宮大夫の比定について一言しておく、と、『公卿補任』（新訂増補国史大系本を使用。以下同じ）正元元年の項では洞院公宗を東宮大夫としているが、『経俊卿記』正元元年八月十一日条、『民経記』同年十一月一日条には「春宮大夫通成」とあるため、そちらに従っている。

(11) 「二禅記」建長七年十月廿七日条（『圖書寮叢刊 仙洞御移徙部類記 下』一九九一年、明治図書。以下『仙洞』と略記する）二五頁以降。

(12) それぞれ『公卿補任』の文永四年、文永三年、弘安四年の項。

(13) 「後嵯峨院御処分帳案」（『皇室制度史料 太上天皇一』一九七八年、吉川弘文館。以下『太上天皇一』と略記する）三五六頁以降、三七〇頁以降。

(14) 「後深草院御処分状案」（『太上天皇一』三五七頁、三七二頁以降）。

(15) それぞれ『公卿補任』文永三年、建治元年の項。

(16) 「師冬記」文永七年八月廿一日条（『仙洞』一〇四頁）、『源垂記』同日条（『仙洞』一〇六頁）など。

(17) 前掲「後嵯峨院御処分帳案」。

(18) 「亀山院御凶事記」（『太上天皇一』三五七頁以降）。

(19) 「後宇多上皇御処分状写」（『太上天皇一』三三六頁以降、三八五頁以降）。

(20) 同前。

(21) 『葉黄記』宝治二年十一月二日条。

(22) 『公卿補任』弘安七年の項。

(23) 「経俊卿記」正元元年八月十一日条、『民経記』同年十二月廿二日条。

(24) 『尊卑分脈』第二篇六九頁。

(25) 「経俊卿記」正元元年八月十一日条。

(26) 同前。

(27) この「行澄」はおそらく、十九年後の弘安元年、後深草院の仁和寺御幸に際して北面の一人として供奉している「前対馬守行澄」のことではなからうか（『後深草天皇御記』弘安元年七月十三日条）。そうであれば、彼はやがて小国ながらも受領の地位を得るようになったと思われる。

(28) 「民経記」正元元年十月六日条。

(29) 「民経記」建長七年七月十日・廿七日条、正元元年八月十一日条、同年十月廿一日・閏十月廿四日条、『経俊卿記』正元元年三月四日条（この部分は宮崎康充氏「経俊卿記逸文」『書陵部紀要』四三、一九九二年）に紹介されている、同年八月十一日条など。

(30) 「公卿補任」文永三年の項。

(31) 『公衡公記』 弘安十一年正月五日条。

(32) 俊光の蔵人就任は「職事補任」(『群書類従』第四輯)では弘安十一年十二月十日となっているが、これは前掲の『公衡公記』の記事が同年正月であることからみても誤りである。『公卿補任』永仁三年の項にあるように弘安十年十二月十日に蔵人に補されたものであろう。

(33) 前掲「後嵯峨院御処分帳案」。

(34) 『公衡公記』 正和四年四月廿五日条。愛一―三八八。

(35) 室町院領に関する專論としては夙に中村直勝氏「室町院領」(同氏『庄園の研究』「一九三九年、星野書店」所収。初出は一九三三年という。筆者が参照できたのは一九七六年に防長史料出版社から復刻された版である)がある。また、金井静香氏「再編期王家領莊園群の存在形態」(同氏『中世公家領の研究』「一九九九年、思文閣出版」所収)でも論及されている。

(36) 金井氏前掲「再編期王家領莊園の存在形態」。関連史料は『兵庫県史 史料編 中世九・古代補遺』(一九九七年、兵庫県の「皇室関係文書」(室町院領)に収められている。

(37) 「本朝皇胤紹運録」(『群書類従』第五輯)。

(38) 『公卿補任』 建長二年の項。

(39) 『公卿補任』 延慶二年の項。

(40) 『尊卑分脈』 第一篇二九三頁。

(41) 前掲「後宇多上皇御処分状写」。

(42) 『公卿補任』 弘安四年の項。

(43) 『鎌倉遺文』(第二十巻) 一五六七六号。

(44) 『公卿補任』 弘安六年の項。

(45) 『勘仲記』(弘安七年三月分までは、刊行中の史料纂集本を使用) 弘安六年四月六日条。

(46) ちなみに、永康の弟である永経は、同時期に「春宮(熙仁親王。のちの伏見天皇・富小路殿(後深草院)殿上人」(『実躬卿記』 弘安六年四月廿一日条)といわれている。兄弟がそれぞれに、二人の院の近臣となっていたのである。なお、同年三月に「又依召参 本院(後深草院、(藤原)永経申一楊御厨間事、前藤中納言(日野資宣)不申達、可 奏之由、有仰」(『経任卿記』 弘安六年三月十九日条。愛一―四七九)との記事がみえることも、永経がそうした立場にあつたゆえのことといえようか。そうであれば、この記事から永経を当時の尾張の知行国主ではないかと推測した「二覧」の表記は、やや勇み足であつたということになりそうである。

(47) 『勘仲記』 弘安六年十一月廿一日条。

(48) 『尊卑分脈』 第四篇五三頁。そこに「正平五六々卒」との尻付があるのは、「正応五」の誤りであろう。永仁六年(一二九八)に伏見院の上北面として「故知嗣朝臣子」である知経が追加されたとの記事がみられるからである(『公衡公記』 永仁六年八月七日条)。

(49) 『公衡公記』 正和四年四月廿五日条。

(50) 同前。

(51) このことは、当時の加賀も院分国であった可能性を示すのかもしれないが、小稿ではこれ以上踏み込まない。ちなみに史料四の直前、文永四年十一月に加賀の知行国主であったことが確認できるのは、史料三にも登場した平時継である(『民経記』文永四年十一月十八日条)。こちらでもやはり院近臣としての知行国主であった可能性が高いであろうし、あるいは前記の文永三年における蓮華王院供養の費用調達に關わってこの地位が与えられていたのかもしれない。

(52) 『法相記』文永七年八月廿一日条(『仙洞』一〇三頁)。

(53) 『勘仲記』文永十一年七月十二日条。なお同月二十五日の小除目では知嗣の男である知顯が摂津守に任じられている(『勘仲記』七月廿六日条)。

(54) 知嗣個人がというよりも、彼の家がそうした業務を請け負う存在であったのかもしれない。彼の父である知茂は、正元元年に新造された大宮御所に關わって「去年春回祿之後、前相国(西園寺実氏)又仰彈正大弼知茂朝臣被造宮、彼朝臣知行備前国造進之、大宮院御所也」(『民経記』正元元年八月十一日条)といわれている。大宮院の実父である西園寺実氏の指示により、知茂が備前の知行国主になって、大宮御所再建のための費用を調達したというのである。前記のように、前年の正嘉二年には備前が大宮院の分国になっていたことを確認できるから、知茂は大宮院の御所造宮を進めるために、

その分国に臨時の知行国主として送り込まれ、財務の腕を振るったのである。このように財務的な必要によって、分国主と知行国主の併存という複合形態があらわれるという構図は、尾張の状況を考える場合の参考になるであろう。さらに知茂には、弘長元年(一二六一)十二月に後嵯峨院が冷泉万里小路殿御所に移った時にも「件御所備中前司知茂朝臣賜備中国造進之、遷御之後被仰勸賞、知茂朝臣被聽内昇殿、被仰備中国重任云々」(『師弘記』『仙洞』八八頁)との記録が残る。また、家業の継承という点を考える上では、文永元年(一二六四)十一月、後嵯峨院と大宮院が禅林寺新御所に移った際、「知茂朝臣作始之处、去年早世之間、子息知嗣雖為重服中相統終功」(『二禪記』『仙洞』一〇一頁)とみえることが参考になろう。

(55) 『公衡公記』弘安六年九月五日条。

(56) 『勘仲記』弘安六年二月廿六日条。

(57) 『公衡公記』弘安六年七月廿一日条。

(58) 周知のように史料大成本『勘仲記』は、自筆本を用いることができなかった当時、東京大学史料編纂所所蔵九条家本謄写本を底本として、数種の写本を校合し活字化されたものである。いうまでもなく、『愛』の編纂にあたっては、できるだけ良質の典拠を求めることが原則であった。そのため、大成本『勘仲記』は検索の参考とはしたものの、実際の史料の引用に際しては、国立歴史民俗博物館所蔵の自筆本『兼仲

卿記』を東京大学史料編纂所架蔵の写真帳で確認し、筆耕するという手順を踏んでおり、それは巻末の出典一覽に明記された通りである。しかしながら、弘安十一年四月七日条については、網文を立てて史料本文を掲載するという形をとらず、「二覽」の典拠としてのみ取り扱うという対応とせざるを得なかった。掲載史料は、刊行予定ページ数との関係などから、かなり絞り込むことになっていたのである。そのため、大成本『勘仲記』で人名をチェックするだけにとどまり、その部分を『兼仲卿記』の写真帳で見直すという作業までは行っていない。読者諸賢に『愛』編纂時の不明を陳謝したい。

(59) この記事から浮かび上がってきた、当時の三河の国務知行に関する持明院統と近臣たちの動きについては、拙稿「院分国三河をめぐる持明院統と近臣」(『歴史研究』六一・六二合併号、二〇一六年)で述べた。

(60) 以下、彼の官歴は『公卿補任』各年の項に拠る。

(61) 『尊卑分脈』第一篇七七頁。『公卿補任』文永九年の項。

(62) 『増鏡』第九「草枕」。

(63) 『後深草天皇御記』建治二年六月廿五日条。

(64) 以下の経緯は特に断らない限り『公卿補任』の各年の記事に拠る。

(65) 『吉統記』文永十年四月廿五日条。

(66) 『勘仲記』建治元年十月廿一日条。

(67) 『一代要記』後宇多天皇の項。

(68) 『公卿補任』文永十二年(建治元年)の項。

(69) いずれも『勘仲記』同日条など。

(70) なお兼平は弘安十年(一二八七)八月に関白の座を追われている。この更迭は龜山院主導の人事であった。「殿下(兼平)関白可有御辞退之由、以頭大夫(平信輔)、今日自仙洞(龜山院)被申云々」と記されたのは八月九日であったが、「凡自去年冬有御沙汰、御謙退之条思食定歟」というように、前年来、龜山院は関白交替を求める動きを強めており、兼平も覚悟は決めていたらしい(以上『勘仲記』弘安十年八月九日条)。ただ龜山院の動きは急であつたらしく、十一日に二条師忠に関白宣下がなされ(同十一日条)、兼平の更迭は「無表儀」(『公卿補任』弘安十年の項)という異例の形で行なわれた。そのあと兼平は「前殿下昨日御閉門」(『勘仲記』八月十二日条)と蟄居の態となっている。長子の太政大臣基忠も父に連座して十三日に大臣を辞した(同十三日条)。この経緯をみると、兼平は龜山院と対立して罷免された可能性が高い。詳細は不明であるが、この頃の鷹司家が「大覚寺統と疎隔を生じていたことは確かであろう。ちなみに兼平に代わって関白となった(すなわち龜山院によって関白に据えられた可能性が高い)二条師忠は正応二年(一二八九)四月に関白を更迭されるが、その際にも「無上表之儀」(『公卿補任』正応二年の項)という状態であつた。後任には左大臣九条忠教を超越して右大臣近衛家基が任じられた。それについては「左

府并肩、忽超越之条、非言語之所覃、但関東気色之由有沙汰歟、莫言々々」(『公衡公記』四月十六日条)ともいわれる。あるいは幕府が伏見天皇を支えるため、大覚寺統に近い師忠や同じ九条家系統の忠教を忌避したものであろうか。

(71) 『後深草天皇御記』弘安十一年(正応元年)二月廿七日条。

(72) 『公衡公記』弘安十一年二月廿七日条。

(73) 『公卿補任』弘安十一年(正応元年)の項。

(74) 同前。

(75) 『勘仲記』正応元年八月十日条など。

(76) 『公衡公記』正応二年四月廿五日条など。

(77) 『公卿補任』正応二年の項。

(78) 『実躬卿記』正安三年二月十六日条。

(79) 「女院小伝」(『群書類従』第五輯)。

(80) 同前。

(81) 『実躬卿記』正安三年三月十七日条。

(82) 『実躬卿記』正安三年三月十九日条。

(83) これらの記事を書き残した三条実躬にしても、幕府が持明院統から大覚寺統への治世の交替を求めたと聞いて「凡非言語之所覃、末代之至極、可歎可悲、不能左右者哉」(正月八日条)と悲憤の言を発したような立場のゆえか、知行国の伯耆を失っている。そのような視点で見ると、大覚寺統の新たな治世に知行国を得た者たちを「当時就朝家要須之仁」と呼ぶ彼の言い方にも、かなりの皮肉が籠められていたように

思われる。

(84) 『実躬卿記』嘉元二年十月十日条。筆者は「一覽」作成時にこの史料を見落としたため、この情報を活かすことができなかった。深く反省している。なお、この史料は『愛知県史料資料編一四 中世・織豊』(二〇一四年、愛知県)に補二五号として収載されている。

(85) このうち備中は「新院御分」とあるから、後伏見が退位ののちに新たに贈られたものであるかもしれない。退位したばかりの前天皇に「新政権」の側から新たな分国が付与されていた可能性は、かつて後宇多から伏見への譲位の時、幕府から朝廷に「新院御分国事」について「無御知行国者、可為難治歟、被進之条可宜歟」との申し入れがあった(『公衡公記』弘安十一年正月廿日条) などからもかなり高い確率で認めることができる。

(86) 拙稿「鎌倉時代後期の三河・尾張と持明院統」(『豊田市史研究』四、二〇一三年)。

(87) 葉室光顕は応長二年(一二三二)正月十三日に尾張守となっている(『公卿補任』元徳三年の項)。この人物の経歴を辿ると、後醍醐天皇の治世、元亨四年(一二三四)に藏人となり、嘉暦四年(一二三九)に左中弁、元徳二年(一二三〇)には藏人頭に補せられ、頭弁となった。元徳三年(元弘元年)正月には参議に昇る(同・元徳三年の項)。彼が後醍醐天皇の側近であったことが窺えよう。八月に後醍醐天皇が出奔して

討幕の戦いをはじめると、彼も十二月には参議を辞し、さらに翌元弘二年（正慶元年）には「二月六日、被召取武家、関東形勢云々、六月廿五日、配流出羽国」ということになった（同・元弘二年の項）。しかし、元弘三年（一一三三）五月に後醍醐天皇が復権すると、光顕も「五月十七日、詔為本職、八月十五日、兼出羽守、宜為秋田城務之由宣下、十一月八日、辞職、叙従三位」と復帰・昇進の道を進む（同・元弘三年の項）。その最期は建武三年（一一三六）で、「出羽守、五月廿一日、於任国被誅畢」と記される（同・建武三年の項）。建武政権を打倒した室町幕府との戦いに敗れ、落命したものである。

（88）『資名卿記』元徳元年十二月八日条。愛一 一八九三。

（89）『公秀公記』元徳元年十二月廿八日条（『歴代残闕日記』第十八冊所収）。

（90）『公卿補任』元弘二年の項。

（91）『公卿補任』元弘三年の項。